復刻版『吉里吉里語辞典』
―出版へのご協力のお願い―

浅川達人（明治学院大学社会学部）

1. 吉里吉里語辞典とは

岩手県上閉伊郡大槌町は，東日本大震災により甚大な被害を受けました。井上ひさしの小説『吉里吉里人』によってかつて全国に名前が知られた，この大槌町に属する「吉里吉里」という小さな湾を囲む町もまた大きな被害を受け，多くの住民の住宅，商店，職場が津波によって破壊され，流されてしまいました。

この吉里吉里地域には独特の方言があります。同じ大槌町に属する「赤浜」や「町方」で用いられている方言とも少し異なる方言です。この方言―吉里吉里語―を標準語で解説・説明した辞典『吉里吉里語辞典』が，吉里吉里で暮らす関谷徳夫さんによって 2007 年に出版されました。そこには，吉里吉里地域で古くから受け継がれてきた伝統的な価値観や生活がいきいきと描かれています。

流される前の
『吉里吉里語辞典』

たとえば，「相続心（そうぞくこ゜ごろ）」という吉里吉里語があります（「こ゜」は「ご」の鼻濁音を指します）。ある人物の子どものころを回想して，「大将ぁワラスなぁから相続心のある奴だったぁよ」などと評する場合などに用いられます。意味は，「あの旦那は子どもの頃から，家計を維持することを第一義と心得て，少しでもそれに資するよう努める心構えをもった子どもだったよ」となります。この言葉からは，吉里吉里の人々が「相続心」という生活理念を大切にしてきたことがわかります。このように，吉里吉里語辞典には吉里吉里での伝統的な人々の生活が記録されているのです。

2. 文字データの復旧，復刻版出版に向けての活動

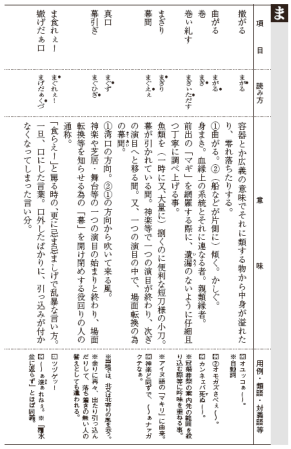
この『吉里吉里語辞典』は，東日本大震災の大津波により，著者である関谷徳夫さんの自宅もろとも，その在庫の全てが流されてしまいました。また，『吉里吉里語辞典』を印刷した釜石にある東海印刷所も，１階にあった印刷機が津波により破壊されてしまうという大きな被害に遭いました。

スキャンした画像データ

2011 年６月，津波で流された品々を整理するボランティアを明治学院大学の学生が行っていた時，流された『吉里吉里語辞典』を１冊発見してくれました。それを東京に持ち帰り，しわを伸ばしつつ全ページスキャンし画像データにしました。この画像データを見ながら，一文字ずつ手で入力し文字データに変換するという作業を，ボランティアにお願いすることになりました。明治学院大学ボランティアセンターおよび広報課が学内をはじめ全国に呼びかけてく

ださったおかげで，134 名の方がボランティアとしてこの作業を分担してくださり，2011 年 11 月 20 日に全ページの文字データ化作業が完了しました。

その後，現在（2012 年 10 月 31 日）まで，入力データの校正作業を著者である関谷徳夫さんにお願いし，徳夫さんの修正を文字データに反映させる作業を行ってきました。と同時に，流される前の版では実現できなかった，アクセント記号を追加する作業も並行して行っていただきました。



アクセント記号が追加された復刻版の組見本

現在，全 520 ページ中 300 ページの校正およびアクセント記号の追加が終了しました。2012 年内には全ページの作業が終わる予定です。そして，2013 年 3 月初旬には刊行したいと願っています。印刷は，徳夫さんの希望により，前回の版の印刷を担当した東海印刷にお願いする計画です。東海印刷には，2012 年 12 月に新しい印刷機が入り，印刷業務を再開できる見込みとなりました。そこで 2012 年 10 月 12 日に，120 ページ分の原稿を東海印刷に入稿し作業を開始していただくこととなりました。

3. 自費出版という障壁

ここまで順調にきたのですが，ひとつ大きな壁にぶつかっています。それは，東海印刷さんは「印刷所」であり出版社ではないことです。つまり，今のままだと，自費出版にならざるを得ず，印刷費用（100 万円以上かかる見積もりです）は関谷徳夫さんが支払うことになってしまうのです。

自宅も『吉里吉里語辞典』の在庫も失った，そして 80 歳という高齢の徳夫さんに 100 万円以上の出費をお願いするのは，あまりにも忍びなく，知り合いの出版社に掛け合ってみました。その結果，200 部から 300 部売れる見込みがあるのなら出版するというお返事をいただくことができました。

4. 出版へのご協力のお願い

そこでみなさまにお願いです。1 冊 3000 円から 4000 円の間での販売となる見込みの復刻版『吉里吉里語辞典』のご購入を，ご検討いただきたいのです。購入を希望される方は，希望冊数とお名前を浅川まで email にてお知らせください。購入希望部数が 200 部から 300 部に達すれば，自費出版を回避することが可能となります。

『吉里吉里語辞典』の出版は，吉里吉里の伝統的な生活と文化を守ることにつながるのみでなく，東海印刷の復興を後押しし，その点で雇用の場の確保にもつながります。また，復興の兆しが見えにくい大槌町にとって，復興のシンボルのひとつとなり得ると思います。みなさまのご協力をお願い申し上げます。

浅川達人：asakawa@soc.meijigakuin.ac.jp

本件につきましてお寄せいただいたご質問に対する回答

質問 1：なぜ，紙媒体での出版にこだわるのか。WEB などで公開すれば，費用負担なく吉里吉里語を後世に残せるではないか？

回答 1：私たちも，多くの方々に「吉里吉里語」を知っていただき，この言葉が伝える生活習慣や文化を後世に残すために，WEB での公開を考え，既に 2011 年から準備に着手してきました。明治学院大学の学生ボランティアたちが，吉里吉里で暮らすみなさんに吉里吉里語を話していただき，音声を録音し，吉里吉里の言葉にまつわる思い出を録音した上で文字起こしし，伝統芸能のビデオを撮影しています。関谷徳夫さんの『吉里吉里語辞典』にこれらを追加して，WEB にて公開できるように準備を重ねて参りました（詳しくは浅川の WEB サイトをご覧ください)。

しかしながら，WEB での公開は，紙媒体での出版の後に行うべきであると考えています。理由は以下の 3 点にあります。

(1)現地のインターネット環境が未整備であること。岩手県上閉伊郡大槌町吉里吉里ではインターネット環境は整備されておらず，WEB で公開しても，アクセスできる人はごく少数です。次世代を担う子どもたちも，WEB を通じてでは，吉里吉里語辞典にアクセスできない状況にあります。
(2)「復興」を実感できる目に見えるモノが必要とされていること。吉里吉里も他の津波被災地と同様に，目に見える復興は進んでいません。もちろん復興計画等は動いているのですが，それは目に見えないのです。復興過程が見えないかで，じっと耐え続けなければならない現在の被災地で暮らす人びとは，目に見える復興の形を切望しているのです。
『吉里吉里語辞典』を冊子体で出版すれば，仮設店舗で営業している飲食店などにも置いていただくことができます。ひとつの「復興」の形を，手に取ってみることができるのです。
(3)著者である関谷徳夫さんが，WEB での公開よりも前に，まず冊子体での出版を行って欲しいと強く希望されていること。

これらの点から，冊子体での出版を先行するべきであると判断いたしました。

質問 2：なぜ関谷徳夫さん，東海印刷所という特定の個人や事業所の支援をするのか？
回答 2：我々の支援は，「対口支援」という考え方に基づいています。ご承知の通り，この考え方は四川大地震の復興支援から採用されるようになった支援方法であり，被災地と支援者が対になって復興支援活動を行うという方法です。明治学院大学は大槌町と正式に協

定を結び，大槌町の復興を支援し続けるという態度を表明しています（2012 年 3 月に協定を結びました）。

大槌町に対する支援ではあっても，他の被災地に対する支援にならないのだから，大槌町のみに対する支援を行っても意味がないとは，おそらくどなたもお考えにはならないと思います。明治学院大学が大槌町を支援し，たとえば，他の大学が宮古市を支援し，被災地以外の自治体が釜石市を支援する，というように支援の輪が広がっていくことを，むしろ期待するだろうと思います。

個人や一事業所を支援するのも，同じ理由です。復興に向けて動き出した，あるいは動き出そうとしている個人や企業を支援する。そのような支援が複数動き出せば，やがては被災地全体の復興支援につながっていくと期待できます。

確かに，行政からの支援は，一個人や一事業所に対してだけ行うことは難しいです。したがって，我々のような民間がそのような支援，広義の「対口支援」を担う必要があると，考えております。